

やさしい病害虫講座 24

「サルスベリ花満開、病害虫も大張り切り」

木村 裕

夏の花として長く咲き続けるサルスベリの病害虫を紹介します。

【うどんこ病】

名前の通り、うどん粉を振りかけたように葉やつぼみに白い粉のような物がつく病気で、どこのお庭でもごく普通に発生します。非常に厄介な病気で被害を受けた葉や蕾は粉まみれになって花つきが悪くなります。5月の新葉展開時から発生し、秋の花が終わる頃まで連続的に発生します。このうどんこ病は、マサキ、ハナミズキ、カシ類でもよく発生します。ならやまの農園ではエンドウの葉や実が真っ白になっていましたね。乾燥すると発生しやすいと言われていますが、それほど乾燥していなくても発生します。

そのまま放置すると花つきが非常に悪くなりますので、発生に気づいたら「うどんこ病」専用の殺菌剤を散布します。早いほど後の回復が早い。



【サルスベリヒゲマダラアブラムシ】

葉の裏にゴマ粒のような黄色の小さな虫がいつぱいつきます。葉の裏から貴重な栄養分である汁を吸いますのでかなりダメージはあると思うのですが、サルスベリはかなり鷹揚で、たくさん虫がついても何も言わず、平気な顔をしています。

しかしアブラムシはお尻からべとべとした物質を断りもなくどんどん排出するので、葉や枝はべたつき、その上に虫の脱皮殻やホコリが付着して葉は汚くなります。後始末はしてくれません。

幼虫も成虫も体色は黄色ですが、成虫は褐色の斑紋のある羽があるので、親子の区別は簡単です。また、このアブラムシはサルスベリ以外の樹にはつきません。

アブラムシの発生からかなり遅れてテントウムシがやってきます。彼らに任すのも一つの方法ですが、テントウムシに悪い影響のない「アブラムシ」専用の殺虫剤を散布するのもよいでしょう。



【サルスベリフクロカイガラムシ】

幹や枝に一年中住み着いているカイガラムシですが、皆さんのお目に留まるのは5月頃と9月頃で、体内に卵をいっぱいため込んだお母さんの姿です。

枝や幹の上に白色の米粒のような物がいつぱいつ着します。これを割いてみて、紫色の虫がおればメスの成虫、パラパラと粉が落ちるようならそれは卵です。

5月ごろ卵からふ化した幼虫は枝にとりつき汁を吸いながら成長し、9月頃に成虫になります。この2回目の成虫からふ化した幼虫は冬の寒い間は樹皮や幹の隙間に潜んで少しずつ成長して春を待ちます。

アブラムシと同じようにお尻からベタベタした粘液を出しそれが葉や枝に付着します。その上にスス病菌が寄生しますので黒く汚れます。

カイガラムシは防除の難しい虫です。白い虫を見つけたら歯ブラシのような物で樹皮をこすって落とすのがよい防除法です。薬剤散布なら、冬にマシン油を幹に散布します。

